

荒木和博著「講演録 東アジアで自由、民主主義、平和を叫ぶことができるのは日本だけ」

じゅん刊世界と日本、内外ニュース 1162、1163 合併号、2010年5月15日刊を読む

東アジアで自由、民主主義、平和を叫ぶことができるのは日本だけ

1. (1)最初に位置関係のことからご説明します。朝鮮半島は取り巻いている中国があり、そしてロシアの国境がほんのちょっとですけれどもあります。それから日本がこちら側で覆い被さっているような形になる。アメリカはこの地図の中に出てまいりませんが、日本と韓国に軍事基地を置いているということで、朝鮮半島は4大国が取り囲んでいる状態です。これは昔から基本的には変わらない。アメリカが関わってきたのは最近ですけれども、基本的にこういう構図は変わらない。これがある意味でいうと朝鮮半島の不安定性に非常につながるわけです。
- (2)歴史的に考えてみて、ちょっと結論めいた話になってしまうのですが、今から1世紀前、日本はロシアと戦争を行いました。当時、世界で一番強いロシアに新興国の日本が戦って勝てると思った人は誰もいなかったわけです。何で戦争をしたか。ロシアの影響力がどんどん朝鮮半島に下りてきてました。もし朝鮮半島がロシアの手に入ったら、次は間違いなく日本がやられるということで、ほとんど無謀な戦争ですね。その後やったアメリカとの戦争はやり方によっては負けないで済んだかもしれない。途中で終わらせることはできたかもしれませんが、ロシアとの戦争というのは負ければ国が滅びるということも覚悟しなければいけなかった戦争で、それでもやったのはなぜかということ、朝鮮半島が日本にとって極めて重要な地域であったからです。
- (3)半世紀前、この朝鮮半島で南北の朝鮮が戦った朝鮮戦争が起きました。昭和25年(1950年)の6月25日に開戦になる。最初は北朝鮮軍が奇襲で始めた戦争ですから、一気にどんどん下りて行って、釜山の周辺を残すだけになった。しかし、アメリカはすぐに参戦してきた。北朝鮮軍は押し戻されて、今度は中国との国境のところまで押されていった。その時に中国軍は100万ともいわれる大軍を動員して、北朝鮮を支援して助けるわけです。
- (4)中華人民共和国の建国は1949年ですから、朝鮮戦争の前の年です。蒋介石政権は台湾に逃れましたけれども、まだ何とかして大陸に戻ろうということを書いていた時です。国の中も落ち着いていない。いわんや産業とか、そんなことが言えるような状況ではなかった。日本が残っていた遺産である満州国の重化学工業地帯ぐらいしか残っていない。この状態でアメリカを相手にして戦争したら、間違いなく中国はやられると言って、北朝鮮を助けることに反対した中国共産党の幹部が大部分でした。しかし、毛沢東はやると言って介入した。何でか。もし北朝鮮がアメリカの手に落ちたら、次はわが国がやられるということです。日露戦争の時に日本がここがロシアの手に落ちたら、次はわが国がやられると言ったのと同じように、朝鮮戦争当時の中国は、もし北朝鮮がアメリカの手に落ちたら、次はわれわれがやられると言って出て

いったということであり、この中国の参戦もある意味では非常に無謀な参戦だったのですけれども、結果的にはそれによって緩衝地帯を確保することができた。朝鮮半島というのはそういう土地です。だからそのことをみておかないと全体の流れがわからないということになります。

P6 ~ 9

2. (1) これも一つの歴史の流れなのだろうと思いますけれども、日本で去年、政権交代が実現しました。アメリカの国力は今、非常に落ちてきている。この間のトヨタ叩きの問題なんかは愛知県も非常に関係のあるところですが、あれだってアメリカの中の何かしらの意図が当然関わっていたと思わざるをえない。一昨年(2011年)の11月にアメリカは日本の反対を押し切って、北朝鮮をテロ支援国家指定から解除しました。今、アメリカにこの東アジアで戦争をやる能力なんて残っておりません。意志なんかさらさらない。アメリカ軍自体が中東で消耗してしまっていて、軍の内部が崩壊しつつあるのではないかとさえ言われる状態です。こんな時に北朝鮮に対して軍事的な圧力とかかけられるはずがないです。やれば中国を刺激しますから、そんなこと今のオバマ政権ができるはずがない。つまりアメリカはほっぽらかしておいても、この地域から手を抜いていかざるをえないわけです。じゃあ、その時どうなるのか。その穴を埋めるのは結果的に日本しかないのです。
- (2) ちょうど日本の国内で自民党政権がずっと続いてきて、何だかんだいっても自民党に任せておけばいいだろうと。時々、気に食わなかったら野党に票を入れて、お灸をすえてやればいいだろうというふうに言っていた時代がこの半世紀くらい続いてきたのですけれども、それが終りになったということです。今の自民党はもう元へ戻って、また自民党政権ということはまずありえないだろうと思います。それはいる人はみんな自民党であったとしても、また別の政党でもつくってやるしかない。これまで権力のパイを分配するということやってきた政党が権力を失ってしまったら、もう何も残らないわけでございます。これと同じようにどういうわけだか同じ時期に、今までともかく日本の外交は、アメリカの後をくっついていけばいいんだと言ってきた。日米同盟は間違いなく機能していて、ともかく何だかんだいっても日本を守ってくれるんだというのがわれわれの意思だった。ともかく自民党に頼っておけばいい、あるいはアメリカに頼っておけばいい、これは左翼も含めて結局そういうふうに思っていたわけです。それがもう後戻りできなくなったということです。
- (3) 北朝鮮のこの状況を今、変えていくのは私は日本しかないと思います。今、日本が何らかの形で関与して、この東アジアの秩序をつくらないと、中国は中国、アメリカはアメリカ、ロシアはロシア、それぞれ勝手なシナリオをみんな書いてくるわけですから、誰かのシナリオに乗っかることになる。そうなってしまえば日本にとって極めて国益を害することになりかねません。われわれがイニシアチブをとって東アジアをこうするんだということを出していく。そしてそれに向かって汗と、場合によったら血も含めて流すことを覚悟して、この地域の平和を構築していかなければいけないのではないだろうかと思います。
- (4) 拉致問題は、私やっていますけれども、絶対にハッピーエンドなんかありません。横田めぐみさんの事件で例えば完全解決って何か。昭和52年の11月15日の歴史の歯車を戻し

て、新潟市立寄居中学校のバトミントンの練習の帰り無事に家に帰ったと。こういうふうにするのが完全解決です。そんなことができるはずがない。今、横田めぐみさん自身は北朝鮮の中で無事です。無事ですけれども、きょう無事だって、あしたどうなるかわからない。そして帰ってきたとしても、その間の何十年の人生を取り返すことはできません。人によっては連れて行かれる途中で殺された人とかもいるわけですし、そういう人たちにとっては全く取り返しがつかないという状況です。そういう状況の被害を受けているわれわれは、この人たちを取り返すために無傷で取り返すなんていうことはまずできるわけがないと思ったほうがいい。それぐらいの覚悟をしてやる必要がある。でも、今、それをやる時期に私たちは来たのではないだろうかと思っております。この東アジアの中で自由とか、民主主義とか、平和とか、そういう価値観で行動できる国というのはもうわれわれしか残っていないんだ、ということをぜひともお考えをいただければと思っております。この北朝鮮問題はわれわれにとって鏡でもございますので、今後また折々いろいろ変化のあった時に何かご参考にしていただければ幸いです。

P58 ~ 62

[コメント]

世界や東アジア、日本の政治・経済・社会の情勢はかつて考えられなかったスピードで、また、お互いに影響し合いながら同時進行で激しく変化し続ける。このような中で、日本はどのような考えのもとに、どのように行動したらよいのか。深く考えさせられる講演速記録。

- 2010年5月15日 林明夫記 -